

後繼者政太夫の偉業

二十四歳で櫓下となる非凡兒

土を耕し、種を蒔き、三十餘年の水の間、毎日てしほにかけて育て、來た、義太夫節がやうやうに緑の葉を出し、末の繁茂を見せようとしてゐる時、惜しいかな、主の義太夫は死んでしまつた。もしもこの若樹を、このまゝに捨て、置いたら、云ふまでもなく、そのまゝ枯れ果てて了ふであらうが、天、義太夫の誠意を嘉納しましたし、美事な後繼者を義太夫にくだされた。

話はすこしもとへ遡る。正徳四年九月十日、一座が杖とも柱とも頼む義太夫に先立たれた、多くの門弟や竹本座の連中は、悲痛哀傷のうちにも氣にかゝるは、明日からの竹本座の運命である。さうして更に痛切な問題は、義太夫に代るべき櫓下の名前主である、座長の後繼である。これは一日も忽に出來ぬことだつた。いつたい誰れになるのだらうと、かうお互ひには云つてゐるものゝ、そこは人間の淺間しさ、高弟達の中では、内々肚づもりで此名譽を荷ふべきもの、

先づ俺れを措いて他にはなからう、我が我がと取らぬ狸の皮算用をしてゐるものも無いではなかつた。けれどもこれは好都合に、さすがの偉人義太夫ほどの人だ、ちゃんと自分で後継者を選んで遺言状を作つて置いたから、先づは醜い争ひなどは起さないうで、直ちに決定できる問題になつてゐた。ところが聞いて見ると意外とも意外、多くの門弟達はあつと驚いて呆然自失してしまつた。これは門弟達の驚きに無理はない、我身の上にふりかゝる大問題だ、傍で聞いてゐたその座の關係者達さへ容易に信ぜられないで己れの耳を疑つたのだ。ところが遺書には判然と、門人利哥竹政太夫の名が認められてゐる。故參の門弟には相當の年輩で、既に一家を爲してゐる人さへある、俺れが俺れがと内々鎬を削つてゐた連中は、驚きよりも一層、なんだ馬鹿々々しいと、寧ろ腹を立てゝゐる手合ひも中にはあつた。逆恨みながら義太夫の肚のうちをさへ疑つたものもある。それもその筈、政太夫は新參も新參、遙かドン尻に控へてゐるまだ二十四歳の青二才であつたのだ。だが恨んだつて憤つたつて、追つくわけのものではない、嚴然たる先師が遺言である。どこか見どころがあつての上に違ひない。もとより悟りきれない連中は、いつまでも、ぐづぐづと云つてゐたが、幸ひにも先師の畏友として、物の解つた準後見格の近松門左衛門がこのごたごたを圓滿に鎮めてしまつて、幸ひに事なく済むには濟んだのだが、

さて若輩の政太夫が、義太夫節の總旗頭、竹本座の頭領、名譽ある櫓下に納まつて、果してその責任を盡くせるや否や、世間注視の問題に移つて行つた。

この晴れがましい位置に据ゑられた政太夫、先師の遺訓を身にしめて、大覺悟をもつて臨んだにはちがひないが、悲しいかな、さう一時に信用は繋げられない、二三興行は殆んど成績不良、おまけに、不平黨の旗頭大和太夫などは二三の連中を引連れてサツサと退座して行くといふ心細さである。何んとかしなければ竹本座ももう此まゝ亡びてしまふのではないかと思はれるやうな状態になつて來た。義太夫歿後一座の後見格になつてゐる近松は、己が執りなした政太夫を此際なんとか救はねばならないと、それはそれは日夜苦心慘澹したが、たうとう「國性爺合戦」を書き卸した。奇抜な趣向と舞臺面の變化と例の妙筆とでおもしろく出來てゐる上に、政太夫が決死的の努力で遂にこれを大成して、一度に人氣を取り返し、古往今來類を見ぬ劇壇に於ける大記録を作つて、三年越し十七ヶ月に亙る連續興行をしたといふのだから凄じい。かうなると次第に調子がついてくる上に、脱退をした者も歸つてくる、政太夫の名聲は日に日に高まつて行つて、はじめて義太夫の睨んだ眼に狂ひが無かつたことがわかつて來た。

異數の拔擢と、門左衛門の愛撫によつて、嶄然頭角を現はして來た政太夫はもとより凡人で

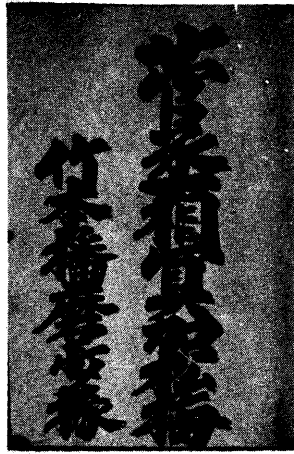
はない。暫く彼れの閱歴を眺めてみる。

元祿四年、大阪嶋の内三ツ寺町に生る。藤姓水原氏、字播磨屋長右衛門、幼名長四郎、諱は喜教、又は文正翁。家は中紅家と云つて資産家であつたらしい。幼少から淨瑠璃を好んで、素人天狗の仲間でも、圖抜けた天才であつた。やがて長四郎は、斯道の誰れもが羨んでゐる、見識のある太夫に成りたいものと志を立て、義太夫の門に入つた。彼れはその後熱心に稽古を勵んで、早く舞臺へ立ちたいといふ望みを起し、師匠にそのことを頼んだが、なかなかそれは許されなかつたのである。といふのは、當時は演し物が五幕あるとすれば、その五幕ともに切場は槽下が勤め、端場を他の太夫が勤めるといふ習慣だつたから、芝居出勤と云ふことになるとなかなか後輩にお鉢が廻つて來ない。それにもう一つ太夫としての當時の重要條件が、音吐朗々たる大聲か、或は艶麗玉の如き美音家で無くてはならなかつた。ところが不幸にして彼長四郎には、そのどちらの一つも備はつてはゐないのである、そこで美ごと落第をした。ところが本人なかなか諦めきれない、すぐお隣りの東の芝居に槽を上げてゐる豊竹座の方へ行つて、その舞臺へ上げて貰ふことになつた、勿論師匠の許可は得てゐた。この時寶永七年、彼二十歳である。それからやがて京都へ移り、また大阪へ戻つて、こんどは曾根崎の芝居へ出たりし

てゐた。その二年間に彼はウンと腕を磨いて、天才の閃きがおひおひ濃厚にあらはれ始めて來てゐた。そこへ思ひがけなく先師義太夫から、竹本座へ出勤せよといふ吉報が齎らされたのである。彼れは始めて己れの素志が貫徹したことを悦んだ。義太夫の思はくでは、現在はともかく、これから先の義太夫節は、どうも今までのやうな、聲ばかりでは不可い、義太夫節百年の大計はやはり藝の内面にある、ところが最近政太夫を聞いて驚いた、彼は聲はないが、その無い聲で、人情の微を穿つた語りぶり、チラチラと義太夫の思ふ圖に當つてくる。こゝに義太夫の想像してゐる、聲よりも腹で語る、といふ新らしい天地が仄かに見えるやうな氣がした。で、とりあへず我が手元へ呼び返していろいろと薰陶をして見た。ところがその鋒銳が次第に現はれてくるので義太夫は非常に満足した。正徳二年三月といふから、義太夫の死ぬ二年七ヶ月前のこと、竹本座では『丹波與作』が出て、政太夫に道中双六の場をお目見得に語らせたのであるが、大方のものは情味の豊かな語りぶりに舌を卷いたさうだ。そんなわけで、義太夫は、たうとう多くの門人の中から政太夫を後繼者に選抜したのであつた。果せるかな、この政太夫が、大物も大物、素晴らしい名人になり、義太夫節をして遂に千年の長命者に育て上げ、師匠ではまだ完成しなかつた、近松の世話物を思ひの儘に語りわけた偉業に於ては、とても匹敵す

る者がない。

それは一つは近松の吾が子を見るやうな慈愛に哺くまれ、政太夫がまた祖父に盡すやうなまこと、があつたればこそ（實際に於ても近松六十三歳、政太夫二十五歳）かういふ美しい實を結んだわけだが、「天網嶋」「女殺油地獄」「宵庚申」「國性爺」「會稽山」「關八州繫馬」



本床蹟眞(夫太政 様少齋播)

かういふ代表的名作はみな政太夫によつて完成されたのである。而かも彼の優れた點はその技藝ばかりではなく、實にその珠の如き人格にある。當時の儒者であり近松半二の親であつた淨瑠璃精通の大家穂積以貫はかう評してゐる。

木訥自ら守り、華美粉飾を避け、邊幅を

飾らなかつたから一見老々として野人の如し。

これは藝人としては珍らしいことで、後年その徳を慕うて門に集まる者多く、門人の如き、式太夫、佐太夫、包太夫、七太夫、志摩太夫、紋太夫、百合太夫、政太夫（二世）、西太夫を

重なるものとして數へ切れないほどである。そんなわけで、享保十九年二月、櫓下となつて二十年目に、他から薦められて、二世竹本義太夫を襲名した。もつとも早くからさういふ推薦を受けてはゐたが、追がに先輩に遠慮をして延び延びになつてゐたといふことである。翌二十年十一月上總少掾を受領。元文三年再び勅許になつて、播磨少掾と改めた。その一月祝儀興行として、近松の「天神記」のうち柘榴天神の條を改作して、一曲物「菅相丞冥加松梅」を出語り、勤めて大好評を取り、かういふ逸話をのこした。それは、門人の脇田氏こと竹本喜太夫が長崎逗留中、師傳のまゝを、清國人の姑蘇の沈草帝及び吳志明といふ人に聴かせたところが、非常に感銘してその全文を寫しとつて故國へ持つて歸り、改めて故國から、播磨掾へと石印二個を贈つて來た。またこの勅許受領の舞臺で使用したといふ播磨掾の正本は（表紙藝題から朱章悉く肉筆のもの）現存の義太夫節朱章入正本としては恐らく最古のものであらう。これは私が正しい傳來によつて襲藏してゐる。

劇壇破天荒の大當りをとつた「國性爺合戦」が、たゞにその時かぎりの一時の人氣ではなく、後年どれほど大きな影響を與へたかといふことは記録する必要がある。政太夫自身としても、その初興行の三年目、享保五年正月、同十六年五月、寛延三年七月の三回の外にも度々上演し

てゐるが、この作から、五年後に出来た「天網嶋」にも、第一段河庄の門口へやつてくるてんがう念佛に、九仙山の文句を取り入れて

樊噲流は珍らしからず、門を破るは日本の朝比奈……………

それ措いて國性爺の道行念佛が所望

ぢや……………

或は太兵衛の綽名を李蹈天と呼ばせて
ゐるなど、なかなか國性爺氣分が去らな
い。尙また享保二年に同じ近松が「國性
爺後日合戦」を、同七年に「唐船嘶今國
性爺」を書いて居り、敵方の豊竹座でも、

紀海音が「傾城國性爺」を出してゐる。



塚しめ埋を帯腹の塚少磨播

さて又歌舞伎の方では、享保元年の秋、京の都萬太夫座で、榊山小四郎（和藤内）、芳澤あやめ（母親）、柴崎林左衛門（甘輝）、山本かもん（錦祥女）を上演したのを始め、翌二年には道頓堀の竹嶋幸左衛門、櫻山四郎三郎、姉川新四郎の三座で競争興行を始め、竹嶋が優勝してゐる。

従つて、それが江戸へ飛火して東西双方國性爺流行の火の手は益々熾んになり、殆んど日本國中國性爺で一ぱいになつた形だ。その影響はやがてまた讀本、草紙、謠曲、繪畫、玩具、人形、菓子、衣裳にまで波及して、なんでもかんでも國性爺でなくては納まらなかつた。

さて政太夫は非聲でありながら（現今斯界の通念では大聲強音でないと語られないと謬られてゐる）三段目の獅子ケ城を語つてゐるが、その初演興行の役割を書いて見るとかうである。

序	竹本頼母	貝盡し	竹本頼母
初段	中 竹本浪花	ツレ豊竹萬太夫	竹本頼母
切	竹本文太夫	口	竹本頼母
道行	竹本文太夫	切	竹本浪花
	口		
	豊竹萬太夫		
四段目	口		
	九仙山 竹本頼母	五段目	竹本政太夫
	景事 ヲキ内匠理太夫		
	おやま入形 辰松八郎兵衛		
	立役入形 津山助十郎		
	同 津山金七		

かくて義太夫節大成の鴻業を爲し遂げた竹本播磨少掾は、延享元年三月、竹田出雲、三好松洛等合作「兒源氏道中日記」を上演中病を得て遂に七月二十五日、行年五十四歳を以て長逝し

た。王臺生活三十五年、語り物九十三番を數ふ。墓碑所在左に、

天王寺西門、納骨堂の背後

一、竹本播磨少掾浮圖

同 所

一、文正翁曲帶塚（舞臺用腹帶を埋む）

千日前法善寺（現今不明）

一、文正翁句碑（竹田出雲の讚句あり）

伏見中書嶋建久寺（現今不明）

一、文正翁扇塚（舞臺用拍子扇を收む）

生玉口繩坂東天瑞寺（小生發見）

一、不聞院乾外孤雲居士の墓（不聞院云々は播磨少掾の法名）

大 近 松 の 死

大阪大火に絡む因縁話

享保九年一月十五日、竹本座へ上演した近松門左衛門の傑作「關八州繫馬」は、堂々たる長編物で、内容も複雑變化を極め、而かも舞臺構造の大きな面白い芝居であつた爲に、名人政太夫の口からひとたびこれが世上に傳はると、それはそれは大變な評判となつた。さうして二月一ばいこれを打續けるほどで、まづそれまでは無事であつた。評判と市中の人氣が騰るにつれて、